「今日の説教、聴き手のために」　2006/12/10　明治学院教会(55)

「エッサイの株」　岩井健作

旧約聖書　イザヤ１１章１節～９（旧1078）

新約聖書　ロマ１５章１２節～１３節（新295）

1、「エッサイの株」は、聖書の術語といってもよい。旧約聖書の紀元前８世紀から７世紀の歴史と予言者の働きがそこにある。予言者イザヤはユダ王国のアハズ王、ヒゼキヤ王の悪政を叱責した。「支配者らは無慈悲で、盗人の仲間となり、皆、賄賂を喜び、贈り物を強要する。孤児の権利は守られず、やもめの訴えは取り上げられない。」(1:23)と。マナセ王は、アッシリヤ帝国に隷属し政権の延命を計るが、もはや人格崩壊を起こしていた。イザヤはダビデ王朝の滅亡を感知した。しかし、王朝は神の裁きで絶たれるが、神の意思は（ダビデの父）エッサイの存在と共に残される事を信じた。それは木の切り株の根っこのようにそこから芽を出すに違いないという確信である。「しかし、それでも切り株は残る。その切り株とは聖なる種子である」（6:13）。イザヤは終末的な救いのしるしをこの切り株に見た。１１章は、歴史の現実の闇にもかかわらず、「エッサイの株」ゆえに希望をもつという信仰。古来、待降節の聖書テキストとして選ばれている。

2、エッサイはユダのベツレヘムの出身（サム上17:12）、信仰深い異邦人モアブの女ルツの孫（ルツ4:17, 歴代上2:9, マタ1:5）、決して豊かではない当時の普通の羊飼い、８人の息子がいた（サム上17:12）。平凡な人間。しかも、その後の聖書での「エッサイの子」という用法はいささかの軽蔑の意味が込められている（Ⅰサム20:27,22:7-8, Ⅱサム20:1, Ⅰ王12:16）。権力を持ったものからの蔑み。イザヤは注意深く、「ダビデ」が象徴するものと、「エッサイ」が象徴するものとを見分けている。ここは極めて大事せある。ダビデ王朝の世俗性、肉の働き、権力の継承に対してはきっぱりと、断絶、非連続を告げる。と同時に「エッサイ」に象徴される、無名、弱さ、神の恵みを受ける以外に誇る要素のないもの、これらは脈々と連続すると。

3、後々、キリスト教会は「その根から一つの若枝が育ち」(11:1)と言う言葉に、救い主（キリスト）イエスの出現という文脈を重ねた。三つの霊の働き(11:2)を救いに与かるものの働きとして捉えた。現代的に翻訳すれば、「知恵と識別」は分析よりも総合を重んじる知恵。「思慮と勇気」は行動力。「主を知り恐れ敬う生き方」は自分を見直す視点。その結果、弱者、貧者、が切り捨てられない世界が実現する（4,5)。

4、「あんにょん・サヨナラ」（日韓共同ドキュメンタリー映画）を見た。主人公李熙子（イ・ヒジャ）さんは父を徴用、死なせ通知もしない日本国家を問う。靖国神社への合祀取下げを訴える彼女の願いは、死者の国家による顕彰のゆえと拒絶される。国家に激しい憤りと恨（ハン）を覚える。しかし、運動の最中、同質の問題と闘う日本人に出会い希望を抱く。そこに「ダビデ王朝」とは別な「エッサイの株」を見る。